

懐かしい佇まいの町、田鶴浜町



田鶴浜町へ

七尾市街地から車で約20分、田鶴浜町へ向かう。主要地方道七尾・輪島線から田鶴浜町に入り、駅前を通り過ぎてすぐの信号を左折すると駅前通りである。田鶴浜町は、10の地区に分かれている。東町といわれるこのあたりは、かつては建具店が軒を並べ、現在も10軒ほどが残っており、「建具のまち」を支えている。

なぜか懐かしい雰囲気がある通りを歩いてみると、建具店の作業場が見えたので、中に入ってお話をうかがった。作業場の中には、木の良い香りが漂っている。松田建具店は、100年続く老舗で松田久一さんはその三代目である。現在は4代目の広司さんが、後を継いでいる。

田鶴浜建具の歴史は古く、1650年、長連龍の菩提寺である東嶺寺を建設するために尾張から二人の指物師を招

いたことから始まる。以来350年の間、何代にもわたり職人の技を連綿と受け継いだ田鶴浜建具は、精巧で美しい組子と重厚さが漂う塗りの豪華さに定評があり、地域ブランドの指定を受け全国に発信している。



東嶺寺

久一さんのお話では、昔の職人は一人前になるまでは、親方の家に住み込みで働いたという。給料がもらえるのは、七尾のか山と明治節、盆と

暮れだけで、みんなそれを染しみにしながら働いた。

建具は、昭和の初めごろまでは、馬車で七尾まで運ばれ、富山県などに出荷されていたそうである。戦後になって、自動車輸送に移行していくが、昭和9年に田鶴浜を訪れた野口雨情は、建具が運ばれていく様子を詩に残している。

田鶴浜から諸国へ送る
障子雨戸は数知らず 雨情

商店が並んだ中町

東町から中町へ歩いていくと、商店の面影を残した家並みが目に入る。弧を描くようにカーブするこの通りは、昭和50年代の頃までは、商店が軒を並べていた。現在も、洋装店や、理容店、和菓子店、金物店など、小路に入れば、魚店や時計店など多くの店が点在し、地域に密着した商売を続け、住民にとって欠かせない存在である。一部は、3月の能登半島地震で倒壊し、取りこわしたり、建替えたりと、街並みも変わりつつある。4年ほど前まで中町の中心地に店舗を構えていた大塚安三さんにお話をうかがった。



昼下がりの通り

中町が買い物客で賑わっていたころは、この通りにくれば何でも揃えることができたそうである。食料品店はもちろんのこと、雑貨店、からつ店、金物店、呉服店などがあった。当時としては、珍しいビリヤードの店もあったという。みんな「まち」へ買い物に行くと言って、この通りに訪れたそうである。相馬や高階地区、塩津や笠師方面からも買い物客が訪れた。店車社会になった現在は、店



3つの郵便ポスト

舗を郊外に移す人が多い。大塚さんもその一人である。しかし、この土地で産声を上げ先々代からこの通りで商売を続けてきた大塚さんは、「私の原点は中町の商店街であり、地域の活性化には、商店街の活性化は欠かせない。共存共栄の気持ちでいつでもまちづくりに協力したい。」と、話してくれた。

田鶴浜駅から、通りを歩いてくる途中、なつかしい寸胴型の郵便ポストを3つも見かけた。現在は、この形のポストはなくなつたはずだが、なぜ駅からこの通りのわずか数百メートルの間に3つもの寸胴型ポストがあるのか不思議に思い、田鶴浜郵便局長の杉澤順城さんに尋ねてみた。

十数年前から全国的に寸胴型ポストから、現在の四角型のポストに移行してきたそうであるが杉澤さんは、通りの情緒風情保全のために通りに合うこのポストを残したのだという。管轄の区域でもこのポストがあるのは、この通りだけである。



なつかしい郵便ポスト

寸胴型ポストは鋳物で腐食しにくいのが特徴で、現在も現役として使われているのは大変珍しく全国のマニアから愛されている。この形は、写真撮りに訪れる人もいるそうである。

こうした地域住民の愛着や思いがいつまでも受け継がれ、この通りがいつまでも守られていくことを願いたいものである。



周辺マップ

(参考資料：田鶴浜町史)

DATA 田鶴浜町の祭り

田鶴浜町には、2月の左義長、4月の住吉大祭、7月の納涼祭、8月の地蔵祭り、9月の秋祭りと年間を通して多くの祭りが壮年会を中心に行われる。

地蔵祭りは、田鶴浜町の8つの地区でそれぞれに行われ、住民の信仰の厚さをうかがうことができる。



地蔵祭り



納涼祭